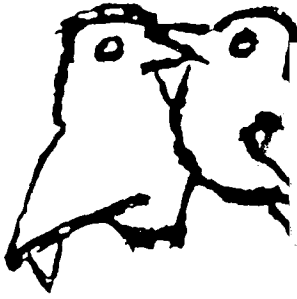
武者小路實篤全集

武安君宫保全集

苏州大学图书馆藏书章



第十五卷

武者小路實篤全集　第十五巻

一九九〇年八月二〇日　初版第一刷発行

著者――武者小路實篤
発行者――相賀徹夫
発行所――小学館
〒一〇一-〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八-一〇〇番
電話　編集〇三-三二三〇-五一三四
業務・〇三-三二三〇-五三三三
販売・〇三-三二三〇-五七三九

印刷・製本――大日本印刷株式会社
用紙――三菱製紙株式会社

Printed in Japan　ISBN4-09-656015-4
© Mushakōji Saneatsukai 1990

＊著者検印は省略いたしました。　＊造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目

次

牟礼随筆・蝸牛独語……一

・『牟礼随筆』

序……三
牟礼随筆
牟礼（むれ）随筆に就て……四
真剣な仕事……五
川端龍子の個展を見て……七
兄　貴……八
支那事変……一〇
戦　争……一一
過ぎたるは及ばざるに如かず……一二
井之頭公園の鯉……一三
生き甲斐……一四
時間持……一四
夢……一六
支那と云ふ言葉……二〇
周作人……二一
調子ッぱづれ……二二
子供の病気……二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松陰の死生観……二三
批　評……二四
先入主……二五
運命観……二六
春……二七
本当の決心……二七
夢と味覚……二八
五十四……二九
かくれた所……三〇
人　生……三一
小さい寂しさ……三二
池の鯉……三三
日本の未来を……三四
支那旅行の夢……三六
戦争がすめば……三六
気　持……三七
梅原の画と志賀の文学……三八
蚊とんぼ……三九
愛読した日本の作家……四〇

泉……四一
『指導と信従』を読んで……四二
怖い顔……四三
筆不精……四五
学習院……四六
蜜柑の皮のすて処……四八
性急……四九
汽車の弁当と胃袋……五〇
泉鏡花と文化勲章……五一
見たもの……五二
日本の女の洋装……五三
静かな内にも……五四
谷崎の仕事其他……五五
僕の字の先生……五七
波の音……五八
遺伝……五九
照宮様の千人針……六〇
殊に英国人に……六一
支那人よ……六一

英　国……六二
北　支……六三
仲よくするには……六四
トルストイ主義……六四
煙草、酒、芸者……六六
自称予言者……六八
正成の芝居……六九
子供たち……七〇
ある本の序文の草稿其他……七三
蝿とり蜘蛛……七四
美術館……七五
国家多事……七六
人間に関する断片……七七
新築地の『どん底』を見て……七九
齢とること……八〇
病　気……八二
読んだ一つ……八二
マンボー、スナメリ……八三
菜食について一寸……八四

文　句……八五
聖フランシス……八六
蘆花公園……八八
秋……八九
長期応戦には……九〇
ある処にはある……九二
創作に対する自分の今の気持……九三
ロダン岩……九四
滞欧雑記
ラフアエル、其他……九六
文芸偶感
風流に就て……九九
自己に忠実なもの……一〇三
画と文学……一〇八
トルストイと現代……一一〇
人間と神の間……一一四
身辺雑事
自分の家は仕事場……一一八
この頃の自分……一二〇

村の兄弟に……一二一
根と実……一二三
画讃其他……一二六
城米さんその他……一二八
自分の望む世界……一三三
・『蝸牛独語』
役に立つか　立たぬか……一三七
続牟礼随筆……一三八
一　正月の夢　一　明石の公園の便所　一　新しき村と土地　一　野心家　一　汪兆銘　一　二　成仏出来る時　一　最も不幸なもの　一　肉食動物　一　支那人と日本人　一　米国を旅行して　一　英仏の外交　一　登　山　一　死に神　一　鉄　斎　一　三　ペ　ン　一　斎藤博の死　一　二セ物（一）　一　ニセ物（二）　一　の字　一　四　汪兆銘　一　自　信　一　忘れる名人　一　新しき村を　一　未　来　一　私の仲間、私の友達　一　五　一寸の虫にも　一　二人太公望　一　遠き慮り　一　大原幽学　一　金まく飛行機　一　目医者は　一　素人考　一　文学の仕事　一　六　「愛と死」に就て　一　子供と小説家　一　子供のこと　一　理想の女　一　神　一　文学の仕事　一　挨　拶　一　どうでもいゝ　一　七　「早春」を見て　一　つまらぬこと　一　五十歳以上　一　のりかけた舟　一　書　一　道を求める人　一　英国人の日本人知らず　一　利害打算の名人　一　夕子の旅行記、其他　一　東京近所の新しき村も　一　英国でもソ聯でも　一　日本の政治家は　一　八　国民の自信　一　汪兆銘　一　墨洋丸の火事　一　満蒙事変　一　捕　虜　一　学校教育　一　時　間　一　有馬君その他　一　九　第二次欧洲大戦　一　原稿紙　一　自己

完成 一 死と年齢 一 欧洲大戦 一 東京近くの新しき村 一 十 新しき村 一 父と母
一 西洋の字と東洋の字 一 独逸とソ聯 一 米 国 一 インド 一 室伏高信の汪兆銘会見記 一 英 国 一 東の村 一 金で出来ない事 一 十一 凱旋の勇士に 一 建国二千六百年 一 死 一 父としては 一 ヂッドの最近の日記 一 西洋人を 一 マッチの不自由
生と死……二〇三
死の恐怖に就て……二〇九
心の鍛錬……二一一
人生に就ての断片……二一四
社会のためか、人間のためか……二一七
生活と文芸に就て……二一八
雑　感……二二〇
病床雑記……二二二
独身婦人に与ふる書……二二六
ある空想家雑記……二三〇
土地を見にゆく前 一 希望の種 一 昨日土地を見に行って 一 空 想 一 不可能なこと
一 馬鈴薯
第二の新しき村……二三五
単純の美……二三七
果して彼等は老いぼれたのか……二三九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

自分に許された仕事以外……二四一
愛郷心と旅……二四三
花の美……二四五
ある日……二四七
買ひたいもの……二四八
映画雑感……二四九
よき家庭……二五一
時間の空費……二五三
運命と死……二五四
鵠沼……二五七
秋の散歩……二六〇
日本のことなど……二六一
白樺を出す前……二六五
木下の思ひ出……二六六
志賀直哉について……二六九
謙遜……二七四
僕の夢……二七五
チェッコ問題から……二七七
親切者……二七八

勝ちぬくことが……二八〇
満洲の作家に……二八一
東洋人が協力すれば……二八三
東亜の資源……二八四
立派なもの許り……二八六
後　記……二八七

楽園の子等……二八九

序……二九一
楽園の子等……二九二
附　録……三五五

大東亜戦争私感……三六一

序……三六三
日本の使命……三六三
日本はなぜ強いか……三六九
日本人の優しさ……三七三
大東亜戦争……三七四
死に克つもの……三七八

未来の東京の夢……三八〇
享楽と生命本位……三八三
日本人の長所と短所—大いなる春……三八五
ビルマ人わが荒鷲を救ふ……三八九
盟邦独伊に感謝す……三九一
勝利はよき哉……三九二
物資の不足に……三九三
資源豊富……三九四
蘭貢完全占領……三九五
蘭印全面的に降伏……三九六
大東亜共栄圏……三九八
日本は戦では負けない……四〇〇
北の守り……四〇〇
コタバル敵前上陸……四〇一
断　片……四〇二
大東亜戦争のその後にくるもの……四〇五
十二月八日……四一一
日本人にも嫌な人間……四一二
奉公の一念……四一二

勝利行……四一三

稲住日記……四一五
序……四一七

新日本の建設……四三七
マッカーサー元帥に寄す……四六七

愚者の夢……四七三
序……四七五

自分の歩いた道……五三五
序……五三七
文学への開眼 ― トルストイとマーテルリンク ― 若き日の読書 ― 蘆花を訪ねる ― 文学の仕事をはじめたころ ― 愛読した樗牛、鑑三、秋水、枯川 ― 漱石と荷風へのおどろき ― 夢中になった絵画 ― はじめての小説 ― 「白樺」という名について ― 処女出版「荒野」 ― 「白樺」第一号 ― 漱石からのハガキ ― 有島武郎の思い出 ― 「白樺」を援けた人々 ― 思いがけないロダンからの彫刻 ― はじめてゴッホを紹介 ― 父子二代の交友――岸田と千家 ― 滝田樗蔭と私 ― 千駄ヶ谷、小石川のころ ― 自然主義文学の全盛期 ― 反自然主義の会合 ― 「新しき村」の動機 ― 「新しき村」の三

十七年 ― 抱月、須磨子の死 ― 白樺美術館のこと ― 「大調和」と「大調和展」 ― 失業時代の仕事 ― ヨーロッパ旅行へ ― 楽しかった美術館あさり ― アメリカ人の美術収集 ― シナ事変から太平洋戦争へ ― 日本人の甘さ ― 大陸旅行のこと ― 終戦相談会など ― 無条件降伏 ― 原爆投下とアメリカ人 ― 追放を招いた天皇論 ― 「心」と「真理先生」 ― 真理と愛と美と

「白樺」の運動……五九五
白樺を出すまで……五九七
序……五九七
白樺と云ふ名 ― 正親町 ― 志賀 ― 木下 ― 僕自身 ― 当時の世間と学習院 ― 始めての小説 ― その頃の他の同人 ― 大学 ― 十四日会 ― 〔雑誌を出すことに〕
「白樺」の運動……六〇九

思い出の人々……六二五
まえがき……六二七
1 わが家……六二八
〈1〉父と母 ― 〈2〉三人のおばあさん ― 〈3〉父の予言 ― 〈4〉父方の血と母方の血 ― 〈5〉家に生命をかける ― 〈6〉幼友だち ― 〈7〉兄 ― 〈8〉美しい記憶 ― 〈9〉死の床で
2 「白樺」への道……六四五
〈1〉三浦の殿様 ― 〈2〉四人の仲間 ― 〈3〉先輩・正親町公和 ― 〈4〉名物学生・志賀直哉 ―

〈5〉上田敏さん ― 〈6〉友情の深まり ― 〈7〉白樺の木へのあこがれ ― 〈8〉大学中退の前後

3 ありがたい人々……六六〇

〈1〉『白樺』を出す ― 〈2〉スローモーの特級品 ― 〈3〉札幌の武郎さん ― 〈4〉年若い柳宗悦 ― 〈5〉早く生まれすぎた男 ― 〈6〉腕力家と情熱家 ― 〈7〉本物への興奮 ― 〈8〉ありがたい男 ― 〈9〉破衣ひょうひょう ― 〈10〉劉生のこと ― 〈11〉自分の背中を如実にかく

4 尊敬する人々……六八一

〈1〉愛する人々へ ― 〈2〉高島平三郎・蘆花・雪嶺さん ― 〈3〉夏目さん ― 〈4〉幸田露伴 ― 〈5〉高村光太郎 ― 〈6〉津江市作さん ― おわりに――僕のねがい

付……六九四

夏目漱石の思ひ出〔「文芸往来」一九四九・三〕 ― 児島喜久雄の死〔「日本読書新聞」一九五〇・七・一九〕 ― 追憶〔「心」一九五〇・九〕 ― 千家元麿〔「新しき村」一九五七・四〕 ― 柳宗悦兄〔「心」一九六一・七〕 ― 柳宗悦〔「民芸」一九六一・八〕 ― 長与善郎に死なれて〔「心」一九六一・一二〕 ― 岸田劉生を偲ぶ（三十三回忌）〔「心」一九六二・一二〕 ― 志賀直哉〔「心」一九七一・一二〕 ― 園池公致兄〔「心」一九七四・三〕 ― 追慕される芸術家（安井曾太郎）〔「心」一九五六・三〕 ― 高村光太郎の思ひ出〔「心」一九五六・六〕 ― 追求する意欲（小林古径）〔「心」一九五七・六〕 ― 正宗白鳥を悼む〔「心」一九六二・一二〕 ― 辰野君に死なれて〔「心」一九六四・五〕 ― 佐藤春夫君〔「文芸」一九六四・七〕 ― 谷崎潤一郎君の死をいたむ〔「心」一九六五・九〕 ― 川田順君〔「心」一九六六・三〕 ― 小宮豊隆君〔「心」一九六六・七〕 ― 小泉信三君〔「心」一九六六・七〕 ― 安倍能成君〔「心」一九六六・八〕 ― 鈴木大拙さんの死〔「心」一九六六・九〕 ― 亀井君〔「心」一九六七・一〕 ― 大原総一郎さんの死〔「心」一九六八・一〇〕 ― 坂本繁二郎の画〔「心」一九六九・九〕 ― 三島君の死〔「文学界」一九七一・二〕 ― 三島由紀夫君の死〔「潮」一九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com